

今年度の建築人賞、大阪建築コンクールの入選作であるこの作品については、すでにさまざまなかたちで紹介されています。改めて、このコーナーでは「20年後に想定している木格子の取替えを通して、動的な建築として時間を繋ぐ持続可能型社会への確かな一歩を築きたい」という思いに焦点をあて、設計者岸下真理さんに語っていただきました。

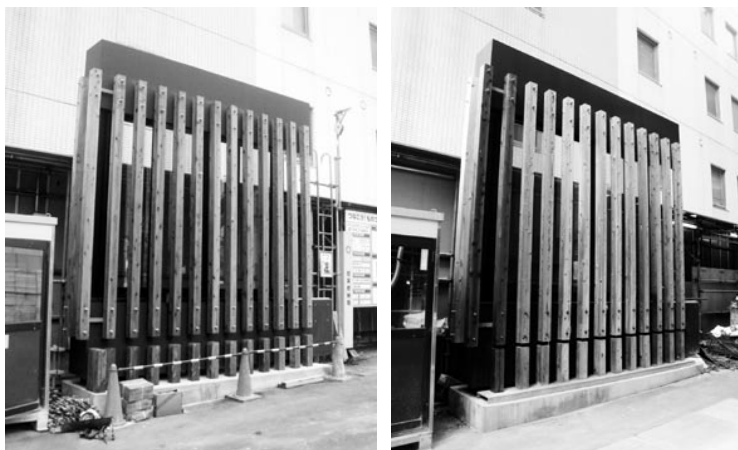
## 外装木格子の取替えで目指すもの -日本圧着端子製造株式会社の場合-

### 岸下 真理

1969年兵庫県生まれ。1995年金沢工業大学大学院工学研究科修士課程修了。1995年～2000年無有建築工房。2001年岸下和代と Atelier KISHISHITA を共同設立。昨年末より築90年の古民家改修に携わり、建築における木材の持つ可能性と人々の想いの重要性を改めて感じている。



木格子上端部の詳細。格子1本につき上下2本ずつの SUS 製 M16 アンカーボルトで外壁(PC板)に緊結している。



現場に設置したモックアップに見る木格子の色合いの変化。(左)2012年6月9日 (右)2013年2月9日

#### ■建築材料としての木材

日頃、小さなアトリエで住宅を中心とした小規模な建築に取り組んでいる私にとって、「木材」は特別な存在ではなく、ごく一般的な建築材料である。住宅などでは構造材、下地材、仕上材と使用される箇所も様々であり、先人の知恵や経験と共に永い年月を重ねてきた「在来木造工法」においては、それぞれの役割もほぼ確立され一種のシステムとして社会にも浸透している。しかしながら現在の建築・建設業界全体を見回してみると、私の常識が決して業界のそれではないことを容易に実感でき、特に住宅以外の建築においては現場で目にするものの少ない材料のひとつと言っても過言ではない。精度と効率性が最優先される現代の現場では、自然材料である木材(特に無垢材)は扱いにくく、出来ることなら使用を避けたいと施工者からは嫌われる素材のひとつである。確かに建材としてのデメリットがあることは否めないが、それでも私は木材の持つメリットに魅力を感じずにはおられない。自然素材、つまり私たち人間(人間も自然の一部である)により近い素材であり、ある程度の強度と加工の容易さを併せ持ち、香り・肌合い・木目など私たちの五感にリンクする側面も持っている。しかし私にとって最も魅力的なのは「循環資源」であるということである。建築材料として使用可能な状態になるまでに多くの時間と手間を要することが、現代の超高速社会あるいは経済最優先社会には適合し難い要因のひとつである。推測されるが、計画的に取り組めば私たちの社会を支えてくれる重要な資源になることは、過去の歴史に学ぶまでもなく想像に難くない事実だと私は

変化を纏わせることで今の時代の「動的な建築」を表現できないかと思慮した訳である。鉄やコンクリート、もちろん石だって常に変化しているが、木材はその変化が比較的顕著である。保護塗装を施さないことで日ごとに色を変えていく「より自然な状態」の木材を多用する建築は、より変化を感じやすい建築になるだろうという想いと期待からこのプロジェクトはスタートした。

#### ■持続可能な循環型社会を目指して

この建物の外壁を覆う木格子は一般木造住宅の柱として流通する杉の四寸角(110×110mm)に熱処理を施した材を採用している。それは古くからある町家などの伝統的な格子と同様に、単なる飾りや内部を隠すためのツールではなく、外部に広がる周辺環境や自然環境とのより良いコミュニケーションを図るための空間装置である。また、外壁を構成するPC板との緊結方法を考慮する(公的機関で実物大実験を行い検証を重ねた)ことで大規模地震等想定外の揺れに対抗する構造要素としての役割も僅かながら担っている。外装の木質化は都市部におけるヒートアイランド現象の緩和に有効であることが実証されつつある一方、大規模建築での木材多用は林業及び木材加工流通販売関係者の意識改革を促進することにも繋がっているようである。外部の木格子に留まらず内部の床及び天井仕上げ、また家具からロールスクリーンまで多くの木材を使用し空間の木質化を進めることで、オフィスとして最も重要である快適な執務空間の形成を実現しつつ、素材感や色調の変化を通して、あるいは20年後に想定している木格子

#### 認識している。

#### ■適材適所

いくら木材に魅力を感じるからと言っても、原理主義的に「全てを木材で!」と思っている訳では決してない。「適材適所」と言うように、物にはその物の持つ「本来の居場所」があるように感じており、鉄やコンクリート等の一般的な建築材料とうまく組み合わせ使用することが重要であるとも考えている。平成22年には「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が施行され、国産木材利用への追い風が吹く中、民間問わず少しずつはあるが大規模建築においても木材利用が広がりはつつある。その中でも「大規模木造」が各方面で研究・開発されており、木材を様々な方法で集めた材から鉄やモルタルとのハイブリッド材までいわゆるエンジニアリングウッドを用いた大規模な木造建築の出現が増加している。しかしながら、高度な技術や特殊な工法を要するそれらの取組み以外にも、もう少し手軽に木材のメリットを生かした使用方法の選択肢があるはずだという個人的な想いを以前から持っていた。巷に溢れる一般的な工法の延長線にある方法と日本中どこでも入手可能な材料を用いた取組みを都心の大規模建築において実践することになったのが、昨年6月に竣工した「日本圧着端子製造株式会社」である。

#### ■時間感覚と想像力

建築行為における「時間感覚の欠如」は社会全体にとって大きな問題であり、私たち日本人が古来より育んできた豊かな時間感覚を取り戻す必要を強く感じている。取替えを通して、動的な建築の在り方を表現したつもりである。メンテナンスフリーという思想を見直し、しっかりと手を掛けて(当然、お金も掛るが)継続的なメンテナンスを繰り返す。たかだか400㎡(立方メートル)の木材利用で劇的に状況が変化するとは思っていないが、このプロジェクトにおける「変化と繰り返しの可視化」を通して、その場所に流れる時間をしっかりと積み重ねていくということをまずは目指したい。そして同時に、都市部におけるヒートアイランド現象等の環境問題や日本の林業が抱える様々な問題を解決して持続可能な循環型社会を形成していくための小さくても確かな一歩となることも願っている。

#### ■建築の射程

循環型社会における建築の永続性は、

いる。悠久の時を越えるためには「変化」し、「繰り返し」を続けることが必要である。伊勢神宮の式年遷宮は極端な例だとしても、腐った柱脚部の接ぎ木をはじめ、茅や瓦屋根の葺き替え、土壁を守る壁板の取り替え、畳の表替え、襖や障子の張り替えなど建築における変化と繰り返しは、永い歴史から見ればついこのあいだまで私たちの身の回りで行われていた当たり前の行為である。今でも完全に姿を消してしまった訳ではないが、それらの行為の絶対数は確実に減少の一途を辿っている。「メンテナンスフリーで手間の掛らない建物」という幻想が時間感覚と想像力の欠如を招いたのではないかと私は考えている。しかしながら、効率性を最優先し経済成長を目指す社会の中ではそれもある意味仕方が無かったのではないかと、安易に過去を否定するだけでなく、これまでに経験してきた時間をも含めたこれからの建築の在り方を考えたいと日々思っていた。

#### ■動的な建築

「永遠」とは止まった時間のことではなく、「変化」し「繰り返し」を続けることである。つまり、静止しているのではなく運動していることが重要なのではないだろうか。考えてみれば私たち人間を含む自然全体が常に動いている。動くことで平衡を保つという奇跡的な状態をほぼ意識すること無く日々の生活を送っている私たちと同様に、実は建築物も常に動いているという見方、建築は不動産ではなく微動産であるという感覚。現代に生きる私たちは、その微動を捉える目と感覚を退化させつつあると思われるので、その弱った目や感覚でも捉えやすい

物理的な耐久性によってではなく論理的なシステムによって実現されることにならるのである。それは機械的なシステムではなく、より自然的なシステムであると思える。しかしながら、そのシステムも自動的に機能する訳ではなく、結局のところ人々の想いが動かすことになると思える。私たちはその想いを時間的にどれ程遠くまで届けることができるのだろうか。先のことには誰にも分からないが、私はできるだけ遠くまで届けたい。「もの」としての建築ではなく、「こと」としての建築に載せて届けたいと思っている。なぜなら、今も昔も変わらずに、そしておそらくこれから先も、多くの人々が想いを寄せ、多くの人々の大切な存在になることだけが、建築が永きに渡り生き続ける唯一の道だからである。

